

一人ひとりの想いつたえたい >>> あなたの声でつくる情報誌

NO.54

2004・春号

ま な こ

企画・発行

武蔵野市企画政策室市民活動センター男女共同参画担当



● つくる ●

取 材

愛を注ぎ、育て、心を伝えて学校をつくる
私たちの働き方—ワーカーズ・コレクティブ
母親ビジネスに想いをこめる

後藤文雄さん

パンの家 樺

「ハーブグローブ」代表 内田淳子さん

いつでもだれでもYū・ゆうへようこそ

Yū・ゆう代表 根本美奈子さん

情 報

知っていますか? 「育児工学」 東京電気大学超電導応用研究所 小谷博子さん

レポーター 体験記

神父様も、やきもちやき?!
あとに続く人たちを「つくる」ためにつくったお店
仲間といっしょに子育てできたら

福井貴美子さん

松田理恵さん

菊谷美恵子さん

私たちの働き方 — ワーカーズ・コレクティブ

「安心素材のパンを自分たちの手で」と地元の主婦たちが1993年に創業した「パンの家^{けやき} 樗」は、天然酵母と国産小麦・無添加のパンで好評だ。

アトピー児の食卓を彩るアレルギー対応品。通勤客や近所の人に喜ばれるサンドイッチ類ほか、節分・ひな祭等の季節限定パン。市役所売店・保育園・他市の高校へも納品する。地域に欠かせないこの店、運営は独特でワーカーズ・コレクティブという。店で働く20代の女性パン職人に話を伺った。

加藤ちひろさんは3年前に就学した。大学で学んで、ワーカーズ・コレクティブを知ってはいいた。求人広告で身近にあるのに驚き、また『プロのパン職人』という響きに惹かれた。

店は狭いが、設備の整った工場。経験年数や世代の違う同僚も上下関係はなく、同じ立場でモノづくりに意見を寄せ合う雰囲気もいい。3万円ずつ5回分割で出資し、共同経営者になった。

パンの技術は奥深く、工夫を重ねてもボツになるときもあれば、偶然作ったパンが好評で店頭にすぐ並ぶこともあり、面白い。ユニフォームのTシャツや宣伝チラシには得意のイラストを生かせる。企業なら製造・営業・宣伝と任務



「お客様には、パンを持ち帰る袋の持参をお願いします」と佐藤さん

分担するところを、店ではやる気次第で何でもできるのも楽しい。

もちろん責任も伴う。時間配分のミスが保育園の昼食用パンの遅配につながったことがある。それ以来、発酵・コネ等工程時間を綿密に計算する。

佐藤瑞恵さんは一般企業を退職後に専門学校でパンづくりを学び、同店に飛び込んだ。窯番・発酵などのほか店番にも立ち、経理も勉強できる。今はやはり共同経営者だ。「条件は甘くない。たくさん働いて収入を上げたくても、メンバー全員が一斉に働けるほど広くないので、同じ時間帯を皆が希望すれば調整が必要。年金・保険を含めた社会的な面の整備があれば心強い」。

4月には開店11周年フェアをする。

毎年、人気キャラクターのパンを特別に焼いて店頭に置き、重さ当てクイズで金券を贈る。地域とつながる企画のため、今年も店では試作中だ。

(取材 藤井美里)



「こんな日はパンを食べよう」のオリジナルTシャツを着て働く加藤さん

パンの家 樗

〒180-0012 武蔵野市緑町1-4-11
TEL・FAX 0422(56) 0921
(関東バス「武蔵野住宅」下車すぐ)
営業時間10時半～18時半、日・月定休

●ワーカーズ・コレクティブとは…

雇う・雇われる関係ではなく、メンバー全員が経営者で、かつ労働の担い手であり、運営・出資に責任と権利を持つ。事業目的は営利第一ではなく、自己実現しながら地域・社会に役立つサービスの提供。生活協同組合が女性の社会進出の機運に伴い、専門性のある活動を組織したのが発端になった。2003年で53団体・約520人が東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合に加盟している。食品製造以外に配送業・リサイクル店・保育支援・編集制作等にも業種が広がっている。

カトリック吉祥寺教会

後藤文雄さん

カンボジアの村々に学校をつくっている神父がいる。今年1月、10校目が竣工した。現地の実情を理解してもらうため、そして資金工面のため全国で講演活動をしている。



もらったユニフォームを着て優勝したよ

愛を注ぎ、育て、心を伝えて学校をつくる

79年から10数年続いた内戦は、畑を荒らし建物を壊し、子どもを傷つけ、親を奪った。後藤さんは、80年に現地の写真を見て驚き、翌年インドシナ難民定住促進センター(神奈川県大和市)に行き少年2人を教会に引き取った。13年の間に合計10人の息子、4人の娘を育てた。毎朝通学を見送り、子どもがけんかして帰宅したときにはしっかりと受けとめてやった。例外なくいじめはあったので難民問題を授業で取り上げることが懇願した。生きることで精いっぱいだった彼らに、愛されていることを身体いっぱいに感じとってほしかった。

82年に引き取った少年ラーが12年後祖国帰りをした。半年後、村長と寺の住職からの嘆願書を持って帰ってきた。その村の寺も小学校も焼失していた。「村人に希望を与えたい。それは教育。校舎をつくるのに手を貸してほしい」さつそくラーを総責任者にして建設のための現地NGOを立ち上げ、95年最初の小学校ができた。その後訪れた旧校舎はくずれかけた家畜小屋のようだったり、壁は弾丸の跡だらけ、屋根がないので雨の

日は休校となった。建設予定地では車のバッテリーからとった灯の下で、おとも子どもも夜遅くまで土運びをしていた。雨季になると敷地全体が水浸しになるからだ。その熱心さに村人たちの願いをかなえようと決心した。

講演を聴き援助への協力も増えた。その心根に深く感謝している。しかし、物資運搬費が非常に高い。そして日本製のを大量に送ると現地の産業を苦しめるという現実。「村人たちがどれくらい真剣に分たちで解決しようとしているか見極めねばならない」というラーの言葉を思い出す。援助は相手への尊敬を持ち続ける中で行うものなのだ。

(文 尾花雅子)



村人との約束が守られた学校づくり「労働提供」と「資材を盗まないこと」

●取材体験記



神父様も、やきもちやき?! まなこレポーター 福井貴美子

お目にかかる前は「神父様」と聞いて内心ドキドキでした。が、後藤神父にお会いしてホッ。およそ、説教や厳粛とは無縁の気さくなお人柄で、ご自分の体験を穏やかな笑顔でたくさんお話してくださいました。

中でも印象に残ったのは里子の娘が彼氏を連れてきたときのこと。やきもちから会おうとしなかったそうです。どこにでもいる頑固おやじそのものです。

私とはかけはなれた世界にいる人というより、一人の人間として、父としての存在感が、とてもあたたかく感じられました。

いつでもだれでも Yū・ゆうへようこそ

Yū・ゆう代表 根本美奈子さん 境



・94年、「親も子も夢中になつて遊ぶときを過ごそう」という数組のお母さんたちの声でスタートした地域の親子サークルYū・ゆう。「これから仲間づくりができるようにYū・ゆうを続けたい」という想いから、00年に根本さんが代表を引き受けた。

Yū・ゆうには三つのセクション

がある。**もりもり会**は親子向けのイベントの企画・運営を行っており、赤ちゃんも一緒に楽しめる「おひざの上のコンサート」は昨年10回目を迎えた。他の団体と一緒に講演会なども開催している。**木苺会**は子育てや医療に関することをテーマに学んでいる。**Duo (デュオ)**は交代制保育をしながら、お母さんのためのピアノ教室。

「形を守るのではなく、メンバーが無理をせず長く活動していきたい」という根本さんだが、「こころんこ」という親子で遊ぶ未就園児の育児活動が、メンバー不足で終了したことは今でも残念に思っている。

子どもが育っていく中で10年続くサークルはめずらしい。いつでも誰でも参加できることが長続きの秘訣なのかもしれない。子どもを育てる上でも、本当に信頼できる友だちが何人もいるということはとても大切だ。

「子どもたちが大きくなっても今やっている活動を地道に続けていきたい。新しいセクションをつくってもいいし、これからサークルを立ち上げたい人には、今までのノウハウなどを伝えたい」まだまだ、活動は進行形である。

(取材 星 詩子)

問合せ

Yū・ゆう事務局(根本)
TEL・FAX 0422(53) 7207

●取材体験記

仲間といっしょに子育てできたら

まなこレポーター 菊谷美恵子



左からレポーターの菊谷さん、曾我部さんとお話をしてくれた根本さん

最近、1年続いた育児サークルを解散した私には、今回お話を聞いたYū・ゆうが、10年続いていると聞きとても驚きでした。普通、育児サークルは、子どもが幼稚園に行くまでは頑張るけれど、その後は自然消滅というパターンが多いのでは。しかも、Yū・ゆうは内輪のメンバーだけで盛り上がるのではなく、常にメンバーを募集して広げていこうとしている点もやはり長く続く所以ではないでしょうか。代表の根本さんが「大変なことを通して信頼できる友人ができたし、また活動した経験がすべて実となって、その経験が必ず今後に生きる」と話されたのがとても印象的でした。

子育て中、実際はかなり孤独。子どもと二人っきりだと煮詰まってしまうときに、Yū・ゆうに参加し、お母さん自身が楽しめてリフレッシュできれば、子どもにとっても幸せだと実感します。

根本さんの「Yū・ゆうで安心して頼れる・頼める友人が身の回りに1人だけでなく、たくさんできた」が心に響きました。子育てを終えてもずっと付き合える友だちに出逢えたらすてきだなと思います。

母親ビジネスに想いをこめる

「ハーブグローブ」代表 内田淳子さん 吉祥寺南町



7歳と5歳の母「小さなビジネスでいい。ゆっくりと、でもあきらめないこと」

子育てを楽しみ、子育てと両立する仕事をつくりたい。そんな母親たちの願いを体現したのが母と子のアロマテラピー専門店「ハーブグローブ」を運営する内田淳子さんだ。大学卒業後「何かを表現し伝える仕事」を求めて、教育雑誌の編集に携わった後、番組制作会社でプロデューサーとしてキャリアを積んだ。やがて夫と2人で独立。長男誕生後も海外のドキュメンタリー番組などを手がけた。「子育てだけに充足できない自分がいた」とふりかえる。

その後、長女を出産。「自然育児友の会」と出会い、大きな影響を受けた。「この会で知った母乳育児、自然育児を通じて、子どもとの暮らしを心から楽しめるようになりました」今までのように、仕事に復帰することを期待していた夫とけんかになることもあった。でも今では、内田さんが編集長を務める同会の会報誌に寄稿するなど、夫は良き協力者だ。

会の仲間と、趣味のアロマグッズを共同購入する形が発展し、「ハーブグローブ」を立ち上げる。01年6月に化粧品輸入販売業のライセンスを取得。赤ちゃんにも安心して使える自然派スキンケアなどの輸入販売もスタートさせた。「会の中からは自作の抱っこひもや、授乳服の販売をする人なども。私たちのような母親ビジネスは、今よりも子育てを楽しみ、子どもたちが幸せにくらせる社会づくりにきつと役立つと思います」

来年開催される「愛知万博」に、「自然育児友の会」が出展することになった。ますます忙しくなりそうだが「親子の絆の大切さ、子どもたちを愛する心を多くの人に伝えるチャンス!」と目を輝かす。もちろんその想いは扱う商品の一つ一つにもこめられている。

(文 加藤和子)



インターネット通販の他、三鷹産業プラザ(三鷹駅南口)に昨年お店も出しました

「ハーブグローブ」の連絡先
URL <http://herbglobe.co.jp/>
FAX 0422(40) 7905



NPO自然育児友の会

1983年に始まった母乳育児・自然育児をテーマに活動する母親たちの会。全国に約2500人の会員がいる。

●取材体験記 あとに続く人たちを「つくる」ためにつくったお店

まなこレポーター 松田理恵 (写真右)

一番心を打たれたのは、このお店を立ち上げるとき、あとから続くママたちのことや「自然育児友の会」の発展をも視野に入れていたことでした。内田さんは、会の中でアイデアを秘めたまま立ち止まっている人たちを見て、母親たちによる起業ネットワーク「マザリング・ワークス」をつくったそうです。「ハーブグローブ」は、そこで起業を目指す人たちのモデルにもなればとつくられたのです。

「何をしたらいいか、悩んでばかりいないで、まずは『これ』と決めて動き出してみるのよ」初対面のママ(私)へも、これまでの体験談を通してそっと背中を押してくださいました。

ご自身の道のりについて「いろいろな方に出会ったおかげ」と話されましたが、周囲も一緒に育っていけるように気を配る内田さんだからこそ、多くの人を惹きつけるのでしょう。

『まなこ』52号で「女性と仕事の未来館」を取材したときに学んだ「起業」、それは能力だけでは成し得ないのだと、内田さんの笑顔は教えてくれました。



Q 今つくりたいものはなんですか？ またはつくっているものは？

- 仲間・サークル ●趣味 ●自分の時間・自分の空間 ●自作の作品・ホームページ
- 資産・マイホーム ●家庭 ●自給自足の生活 ●家族で過ごす時間
- 健康な身体 ●仕事 ●手作りの夕食

Q もしも願いがかなうなら、今つくってほしいものは？

- 信頼できる病院・中高年の学習の場・歩きやすい歩道・安心して通える学校親の面倒をみられる環境
- 生きがい・話し相手・友人・理解者・能力を発揮できる職場・平和・愛子どもたちがしあわせに暮らせる未来
- 私の分身・過去の自分・家事ロボット・食べても太らないスイーツ

Q “つくる” のイメージは？

手・ごはん・友だち・粘土のお城・自由・未来・希望
農作物・自分らしさ・職人・日本の伝統工芸品

Q よい人間関係をつくるために気をつけていることは？

- | | |
|---|-------------------------|
| ・約束は守る ……12歳女 ほか多数 | ・自分ひとりで過ごす時間を大切に ……47歳女 |
| ・相手の立場になって考える ……15歳女 ほか多数 | ・相手より先に挨拶する ……42歳男 |
| ・金銭の貸し借り ……19歳男 ほか多数 | ・言葉を選んで話す ……34歳女 |
| ・時間を守る ……41歳女 | ・迷惑をかけない ……57歳男 |
| ・噂話をしない・悪口を言わない ……35歳女 72歳女 | ・人の暮らしに介入しない ……53歳女 |
| ・なるべく正直に ……40歳女 | ・親しき仲にも礼儀あり ……17歳男 ほか多数 |
| ・本音と建前を使い分ける ……20歳男 | |
| ・物事や他者に対する自分のスタンスを常に明確にしておく ……36歳女・40歳女 | |

『まなこ』
レポーター
大募集

家庭や地域、社会、労働の場などで男女が抱えている問題について関心があるか、活動している方を募集します。任期は1年間（平成17年3月31日まで）
年4～5回のレポーター会議参加、各号のテーマに関するアンケート、取材や記事執筆などにボランティア協力していただきます。
はがきに「わたしの興味ある『まなこ』へのテーマ」100字程度を記載の上、4月5日までに市民活動センターへ。

* 市民活動センター 男女共同参画担当では *

■平成16年度男女共同参画推進団体名簿への登録を募集します。育児・介護・環境などの問題研究や、趣味をとおして男女共同参画の推進を目指す活動をしている団体について「男女共同参画推進団体」登録を行います。登録団体は活動補助金の交付申請、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの印刷機半額利用・ロッカー利用などができます。

登録要件は、①営利を目的とした団体でない ②特定の政党、宗教、教団を支援する活動でない ③団体の構成員が5人以上で3分の2以上が市内に在住 ④団体の主な活動場所が市内 ⑤団体の組織及び活動のための規約を有する の5つです。

4月5日までの申請分を名簿登載します。その後も随時受付。（申請書は市民活動センターで配布）

企画政策室市民活動センター男女共同参画担当
TEL 0422 (60) 1869 FAX 0422 (51) 5638
URL <http://www.city.musashino.tokyo.jp/>

■2月5日（木）男女共同参画セミナー「いつまでも若々しく健康に～女性外来・女性医療を知っていますか」を開催。全国の女性外来で診療にあたっている医師のネットワーク、「女性医療ネットワーク」発起人のお一人である対馬ルリ子医師に、女性医療のこれまでとこれから、性差医療（Gender Specific Medicine）についてお話を伺いました。受診・相談の窓口に迷う更年期症状の悩みなど、多くの質問がでました。心も体も合わせた一人の人間として話を聞いてくれる女性外来が身近になることを願ったセミナーでした。

■2月9日（月）より、ライター入門講座（全4回）が始まりました。前号で自分史の特集があったせいか（？）嬉しいことに多くの方に応募いただきました。今年残念ながら抽選もれされた方もまた来年開催予定ですので、是非ご応募ください。



知っていますか「育児工学」



日本学術振興会特別研究員の医学博士小谷博子さんは、「育児工学」の研究の傍ら子育て支援グループ「ほっぺにチュ！」を立ち上げ、さまざまな活動を始めた。

子どもにはどうしても母親が必要となきがある、と力説する小谷さんを訪ねて、活動の拠点である葛飾区まで足を伸ばしてみた。



ベビーマッサージには、特に堅苦しいやり方があるわけではありません。赤ちゃんとのスキンシップを第一に、足からお腹、腕から背中というように全身をさすってあげましょう。わらべうたを歌いながらも楽しいですよ。
赤ちゃんばかりでなく母親にも効果があります。マッサージをすることで母親の副交感神経が優位に働き、「休息感」や「ストレスからの解放」を促す効果が認められました。

「育児工学」とは？

育児と最新の工学技術（サーモグラフィや脳波計などのエレクトロニクスやコンピュータ技術）を融合させ、物言わぬ赤ちゃんの気持ちを推し量り、産後の母親と赤ちゃんのために快適な育児環境を実現する学問です。

①産後の母親と乳児におけるベビーマッサージの効果

②授乳中の母親と乳児の脳研究

③だっこ・おんぶ時の歩行解析研究

④絵本の読み聞かせの研究

⑤子育てに関するアンケート調査

⑥産後うつに関する研究などを行っています。

なぜ、「育児工学」の研究を？

女性に多い骨粗しょう症を研究テーマに選び、東大大学院医学系研究科で学位を取得しました。その翌年の夏に、女の子を出産。このときの感動と育児の体験を是非研究に生かしたいと思い、02年11月に専攻を「育児工学」に変更しました。

若い娘を抱えて海外の学会に出張するなど、子育てをしながら、それまでのハードな研究生活を続けることがむずかしかったからという理由もありますが、

出産は、感動的なものでしたか？

これまでの人生でいちばん感動した瞬間だったと思います。実は、卵巣に病気を抱えていて、子どもを持つことはむずかしいと医師から告げられていました。

理解ある地元の産院で夫にも立ち会ってもらい、生まれたばかりの娘を抱き上げ、すぐに母乳を含ませました。母乳は出産後30分以内に授乳すれば出るようになる場合が多いです。必ずしも母親の体質の問題ではありません。また、赤ちゃんの体重が増えないとすぐにミルクを足す傾向があるようですが、生後3日以内の体重の減少はごく生理的なもの。体重の増減にあまり一喜一憂せず、気長に母乳を与え続けることが大切です。

育児情報が氾濫していますが……

あまりにも多い情報と便利さのみを追求した育児グッズが、逆に若い母親たちを追い詰め、育児をむずかしいものにしていくような気がします。実際、さまざまな情報の中には正確なものもたくさんあります。経験的に伝えられてきたことを科学的に裏付けると同時に、母親になる前の若い女性にも育児の正しい知識を広めていくことが必要だと思います。去年の3月に子育て支援グループ「ほっぺにチュ！」を立ち上げました。

「ほっぺにチュ！」の活動は？

自宅のある葛飾区を中心に、ベビーマッサージや母乳育児、授乳中の食事や薬の知識講座を開催しています。また、大学のある千葉県印西市でも、マッサージや母乳育児支援の講座を開いています。どちらの講座にも、どこにお住まいの方でも参加できます。

今後の研究や課題は？

長時間保育や早期教育など、研究の対象は無限にありますね。特に早期教育は母親として興味がありました。医学部時代の仲間たちから「子どもの脳の発達には必ずしも良くない」と忠告されました。子どもは自分で選ぶことができないのですから、親が情報を選んで与えていくなくてはなりません。そのためには正しい知識を伝えていくことが必要なのです。

これから子育てする人たちに

情緒不安定になりがちな産後の母親には、赤ちゃんの父親であるパートナーの支えが絶対に必要です。日本には里帰り出産という伝統がありますが、この時期の父親の関わり方でその後の育児の方向性が大きく変わります。産後に父親も育児休暇を取れるような制度が望まれると同時に、社会全体が母親ばかりでなく、父親も含めた新しい家族の誕生を支援していくことが大切だと思います。

取材 森治美（文）・加藤和子

連絡先

〒270-1382 千葉県印西市武西学園台2-1200 千葉ニュータウンキャンパス 東京電機大学超電導応用研究所 ハイテクリサーチセンター
TEL・FAX 0476 (46) 8753 (ダイヤル・イン) E-mail hiroko@asrl.dendai.ac.jp

レポーター会議から

レポーター会議風景

1月22日(木) 10:00~12:00 市役所第803会議室にて



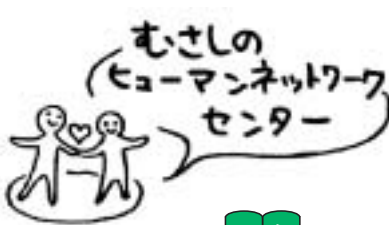
会議の間に保育(2歳~学齢前)を行っています。

●「自分史を書く」興味のある人がいっぱい

- ・若い人でも書きたいことはたくさんある。ただ自分史を書くということは周囲の人もかかわってくるため、それなりの気づかいが必要だ。
- ・自分史は自分をどれだけ客観的に見られるかということ。

●「任意後見制度」に活発な意見

- ・核家族化などで家族のあり方が変わってきているから、制度は必要。
- ・人は老いがきたときに人生観や価値観が表れるから、子どもには「老い」についても日々の暮らしの中で伝えていきたい。
- ・介護保険制度のためにも、任意後見制度を知っておいたほうがいいのではと思う。
- ・今までの後見制度と違い、任意後見制度は自分の意志、生き方を守ることが基本。
- ・制度そのものが知られていない現在、知られることで問題点が浮かんでくると思う。



今回のテーマに関する本を、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書の中から

貸出しもOK!

ほんの紹介

●平成おんな大学 「好き」を「仕事」にするために

長井和子・編著(人間出版)



34歳、2児の母の著者は主婦専門の11年間にピリオドを打ち、コピーライターとしてスタート、広告会社を設立。そして「主婦のための再就職学校・アイムパーソナルカレッジ」をつくった。主婦たち・女たちよ、自分の足で歩き出してとアイムを続けること10年。卒業生たちは懸命に主婦からプロへ自分をつくり変え、育っていく。「私なんて」が「私だって」と思えてくる一冊です。

●シリーズ<女性問題をまなぶ>2 「実践」につなぐ講座の記録 ジェンダーフリーを共同で学ぶ

学びを行動にうつす女たちの会・著(新水社)



女性問題を学んだつもり、学びっぱなしにしないために。「学習をつくる実践講座」では、足立区の「あだち女性大学」受講生たちがジェンダーを学び直し、ジェンダーフリーを地域に広めるための講座をつくり上げていく。メンバー同士のきしみや自分自身の意識のレベルに悩みながら、「教えてもらう」のではなく、「学び合い、つくり上げていく」講座に悪戦苦闘。行動に結びつく深い学びが見えてくる。

武蔵野市境2-10-27 武蔵境市政センター2階
TEL・FAX 0422(37)3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp
URL http://www.clipcraft.or.jp/m_hnc

STAFF

レポーター	市川 順子・勝野 智子 加藤 祐子・菊谷美恵子 高野 良美・塩田 直子 曾我部一美・福井貴美子 古橋 哲・松田 理恵 山田マリ子・和田あやこ 森 治美(編集長)
取材・編集	尾花 雅子・加藤 和子 藤井 美里・星 詩子
☆他にもたくさんのアンケート協力員、編集協力員に支えていただいています。	
デザイン	小井戸厚子
イラスト	本田 倫
印刷	横河グラフィックアーツ株式会社

★主婦になりずつつくっている弁当。夫の職場や子どもたちの成長にあわせて中身も変わった。変わらないのは空っぽの弁当箱を見たときのうれしさ。(尾花雅子)

★子育ての大変さはよく耳にするけれど、子育てって新しい仲間や仕事をつくりだし、生き方を見つめ直せるすてきなチャンスでもあったのですね。もうちょっと早く気づいていれば今ごろは……?(加藤和子)

★公園でバドミントンに夢中の子どもたち。大差で負けていたチームからの「よおし、あと179点で勝てるぞお!」のかけ声でみんな笑い、楽しい雰囲気。和やかな空気をしてくれるって、いいな。(藤井美里)

★たまたま一緒に子育てをしていたからこそ出会えた仲間たち。大人になってから友だちをつくるのができたのは子どものおかげ。子どもが育っても楽しく過ごしていきたいな。(星詩子)

★1年間、たくさんの励ましをいただきありがとうございます。新しい家族をつくる人たちをそと支えてあげるような優しい『まなこ』を、これからもつくっていきます。(森治美)

編集後記